

玉名の遺跡  
シリーズ⑧

ひがしをんだいもんいせき

# 東南大門遺跡

【お問い合わせ】

玉名市教育委員会  
文化課文化財係

TEL.0968-75-1136

bunka@city.tamana.lg.jp



遺跡は、境川右岸の台地上に位置しています。平成6年度の市営団地建設に伴う発掘調査では、弥生時代中期の甕棺墓群や弥生時代終末期から古墳時代初頭の墳丘墓とみられる遺構が確認されています。また、近年の確認調査において弥生時代の住居跡が数基確認されています。

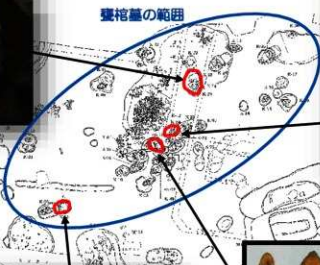
弥生時代中期

～ 弥生人の集団墓地 ～

東南大門遺跡では、合計42基の甕棺墓が検出されています。甕棺は北部九州系（須玖式）と在地系（黒髪式）が混在している状況でした。この中で折れた磨製石剣が内部から出土した甕棺が2基ありました。うち1基は5点もの石剣片（切先）が出土しています。石剣は武器であることから、甕棺内から出土する意味について、「埋葬された人が使用していたもの」、あるいは「戦利品」、「刺さったまま埋葬されていた」などいろいろと考えられますが、弥生時代に戦いがあった可能性もあります。



並んで出土した甕棺  
(K-24・25)



磨製石剣

石剣が出土した甕棺 (K-37)



甕棺 (K-30) 内から出土した石剣片

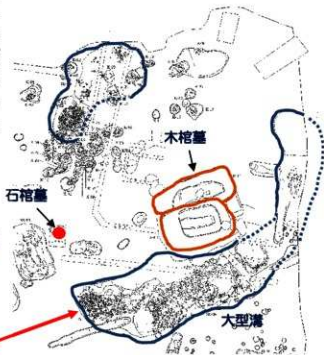


甕棺墓の墓室内から  
出土した鉄剣

甕棺墓 (K-05) の墓室内から2点の鉄剣が出土しています。長さは22cmと15cmで、幅はいずれも約3cmです。甕棺墓が大幅に削平を受けているため、副葬品だったかどうか不明確ですが、弥生時代の鉄剣の出土は県内でも珍しいものです。

主な遺構は、木棺墓2基、石棺墓1基、大型の溝2条ですが、これらのうち、木棺墓と大型の溝は墳丘墓に伴う可能性があります。

木棺墓は攪乱を受けていましたが、一部に白色粘土と赤色顔料が確認されています。溝の幅は5～7mあり、一部途切れますが、円形に近い周溝をもつ墳丘墓とした場合、その規模は、直径約30mと推定されます。しかし、主体部の位置が中心からずれていることや、大規模な削平を受けていることなどから、詳細は不明です。



墳丘墓とみられる主体部（木棺墓）と大型溝

墳丘墓とは？

円形や方形に盛土した中に、甕棺墓や木棺墓といった主体部を埋葬した弥生時代中期からある墓制で、その後、古墳へと発展していくと考えられておる。

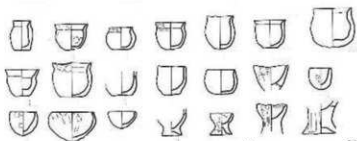


墳丘側の葺石状石材と溝内の土器片



出土した舟形土器  
(弥生時代終末期)

船の形をした小型の土器で祭祀用とみられます。付近に位置する大原遺跡・塚原遺跡からも類似した土器が出土しています。



溝内から出土したミニチュア土器

溝内の土器出土状況

溝内からは、このように土器が多量に出土しています。中にはミニチュア土器なども多く含まれていました。

墳丘側のわずかに残る斜面には、平坦な石が貼られたような状態で出土しており、葺石に近いものと考えられます。これらの遺構は、弥生時代から古墳時代への転換期における墳墓の変遷を考えるうえで大変貴重な例となっています。また、遺跡範囲の南側では、弥生時代後期以降の住居跡が数基検出されています。北側が墓域だったとすると、南側に集落があった可能性もありますが、まだ不明な点が多いのが現状です。今後の調査によって新たな発見があることでしょう。